神余地区説明会　協議録

日　時	令和４年７月１日（金）　19:00～21:40
場　所	神余小学校　校舎プレイルーム
出席者	出山教育長・岡田教育部長・今井教育総務課長・庄司教育推進室長・ 藤本同副課長・小柴副主査（司会）
参加者	４０人　（保護者２０％　地域住民８０％）
記　者	なし（－）

【 概　要 】

○ 教育長説明　５分
○ 教育部長　３分
○ 課長説明　４５分
○ 前日までの質疑応答の紹介　１０分
○ 質疑応答　８０分（１４名）

（学校再編全体の方向性に対する意見）

□ 魅力ある学校を地域に残し、地域との連携の中で学校の魅力をアピールして、子供が自然と増えることを模索すべき。
□ 子供や保護者が学校を選べるように全ての学区をフリーにして欲しい。
□ 複式学級では、上の子が下の学年の面倒を見て、先生や地域の方との濃厚な関わり合いも築けて、マイナスよりもプラスと感じる。

（地区での組織立て方法に関する意見）

□ 保護者ではない地域住民として、どのような視点をもって組織の中で考えたら良いのかについて示して欲しい。

【 個別議事録 】

（参加者Ａ）

・ 資料の 10 頁に、地理的条件等により統合困難な場合がある場合、小規模校のメリットを最大限に活用方策や小規模校のデメリットの解消策や緩和策を積極的に検討実施する必要があるっていうのがありますが、今まで、どのような対策をとってきたのか？

（藤本副課長）

・ 例えば、富崎小と神戸小学校を統合した房南学園では、小中一貫型教育を掲げた学校であり、市内唯一のため、先ほどの指定校変更や区域外就学の判断においても、より柔軟に運用し、就学を希望する場合の受入を行っているところです。
・ また、他の自治体の制度であれば、小規模特認校制度というのもあり、先程の指定校変更と似たような話で学区を全地区対象とするような仕組みもあるところです。但し、学区フリーにすると、その地区の子供たちが、逆に地区外の学校に通いその地域の学校が更なる小規模化を招く場合もあるところで、その辺の見極めが難しいと思います。

（参加者Ｂ）
・ 今お話しされた小規模特認校制度というものについて、市はどう考えているのか？
（藤本副課長）
・ 今回の基本指針では、これから市内１０校の小学校の半数以上が複式学級になると予測されており、それぞれの地域の保護者の方が、自分たちの子供をどういう学校規模に通わせたいのか、それらの意見を集約する組織を立ち上げ、各地域で検討していって頂きたいと考えています。
　その中で、複式規模のままでも学校を残したいとの意見集約が仮になされた場合に、では、デメリットの緩和策としてどのようにしていくのか、保護者の方々はどうしたいのか、そこを考えるのは次の段階だと考えています。

（参加者Ｃ）
・ 現役の保護者でない我々地域住民が、この学校再編を考えるときに、どのような視点を持って考えるべきなのか？
（教育長）
・ 学校という機能は、まず子供のためのものであるという原点に立って、地域としても考えて頂ければと思います。例えば、この資料の 38 頁をご覧ください。これが令和９年度における児童数ですが、１年生が２人、２年生が１人、３年生が０人、４年生が１人、５年生が２人、６年生が １ 人、これが令和９年度であり、この後も踏まえ神余の子供達にとってどういう形がいいのか、例えば祭礼などもあるでしょうけども、それらを含めながら考えていただければと思います。
・ 但し、あくまでも学校というのは子供が育つ場所であるということを前提に、考えていっていただきたいと思っています。

（参加者Ｃ）
・ 地域の意見を纏めた後、学校再編調査検討委員会で結論を出すまでの過程、その辺はどのように考えているのか？
・ 地域の意見どおりになることはあるのか？
（今井課長）
・ まず、市内１０地区でそれぞれ意見を纏めて頂きます。
その後、それらを踏まえたグランドデザインを作成し、当然地域の皆さま方にフィードバックして、それらのやり取りをしながら、最終的な再編計画を作っていきたいと考えています。
・ また、地域の方々が今の形での小規模校を残したいとの意見があった場合、なぜ残したのかを市民の方々に対して、しっかりと説明が出来ないといけないとも考えています。

（参加者Ｄ）
・ 地域での意見を纏めるための会議の回数は、どの程度を想定しているのか？
（藤本副課長）
・ 地域の方々と相談して決めていきたいと考えています。

（参加者Ｄ）
・ 意見として保護者の方々の気持ちとしては、やはり神余小学校を残してほしいと、そういう意見が多かったです。そのような保護者の気持ちも考えて欲しいと思います。
（藤本副課長）

・ それらについて、今後の地域の方々との意見交換の中でオーソライズしていければと、思っています。

（参加者Ｅ）
・ 再編ありきではなく、小規模校の学校を作るといった考えはないのでしょうか？
（藤本副課長）
・ まず、国における小規模校の定義は、クラス替えが出来ない学校規模を指しており、このままでは、市内半数以上の学校が複式学級になってしまいます。よって、仮にどういう再編プランをしたとしても、小規模校は恐らく残る可能性が高いです。
　但し、それがどこの地区に残すのかというのも、これからそれぞれの意見を踏まえた中で、考えていかなければいけないと思っています。

（参加者Ｆ）
・ 過去、神余小学校をモデルに、全国小規模公開研究会を市教育委員会の主催でやったこともあり、神余小学校を教育委員会としてどう捉えているのかを聞かせて頂きたい。
（教育長）
・ 私自身も小規模校での勤務経験があります。また、教育長として歴代の神余小学校の校長先生に語り続けていることとして、子供達が人との接触が非常に少ないので、それらの機会を創出する工夫を行うように指示をしてきたところです。
　例えば、豊房小や西岬小学校との連携もそうですし、地域の方々の大人との交流もそうですし、そういうところを大事にして下さいということを、常々話をしてきたところであり小規模校の良さを生かしながら、またそれらの課題をどう克服していくのかについても話してきたところです。

（参加者Ｆ）
・ 神余地区の中学校を昭和 55 年に統合する時に、小学校は触りませんとの教育委員会の方針だった。その 20 年後には、今度は小学校を統合して下さいとなったが、最終的には校舎を建替えて伝統ある小学校が残った。
　そのまた 20 年後に、統合の話が出てきているが、小規模校のモデルとして神余小学校を捉えれば良いのでは。
（教育長）
・ 大分以前の話は、申し訳ございませんが、私の方も全て認識していません。
・ 今、言えることは、子供達のことを考えたとき、これから地域を育っていく子供たちがどういう学校環境にいるべきなのか。また、地域のコミュニティを考える場合においても、同級生の輪を広げてあげなくて良いのか。
　これから地域を作っていくのは、次の世代の子供たちであり、その子供達にとって何が大事なのかという視点で、それらを皆さま方にも考えて頂ければと思います。

（参加者Ｆ）
・ 生徒がいるいないに関わらず、学校は置いておいて欲しい。
・ もちろんこの議論が、生徒中心であって欲しいのであって、住民もそれに参加し、現在の教育委員会の人達とも前向きな議論をしたいと思い発言させてもらいました。
（教育長）
・ この地域だけではなく、同時並行的に全ての小学校区で話し合いを行い、教育委員会としても、それらを積み上げながら参考にして考えていきたいと思います、ありがとうご

ざいました。

（藤本副課長）

・ 私の方からも検討委員会の中での意見を含め少し補足させて下さい。
現在、日本全国で生まれてくる子供は年間 80 万人と言われています。また、先ほど説明した通り、社会のあり方も急激に変わっています。スマホの浸透による情報化、そのような環境の中で、子供達は社会に出て競争していかなければなりません。
子供達を育てていくとき、ではどういう環境で学ばせるのが最善なのか、小学校の友は一生の友であり、その同級生の範囲をなるべく広げてあげる視点もあるかと思います。裾野を広げることは、地域のコミュニティを維持していくためには重要なことだとも考えられますので、それらを含めて、皆さんと一緒に考えていければと思っております。

（参加者Ｇ）

・ スクールバスを運行するための費用について教えてください。

（藤本副課長）

・ バスの購入費用で概ね 3,000 万円、維持管理運行経費で年間約 500 万円となります。

（参加者Ｇ）

・ 例えば、神余がどっかの学校に統合しようって言った場合、そのためにバスを運行させなくてはいけない。どのぐらいの費用がプラスになるのかも検討の一つにさせていただければなと思います。

（藤本副課長）

・ 地域で議論を行う際には、そのような話を含めた議論が必要だと考えています。また、市の多くの学校施設が老朽化しており、その老朽化した施設の建替費用などを踏まえた検討も必要だと考えています。
・ また、現在は教科書もデジタル化の時代になっており、自宅でタブレット端末を持ち帰ると英語教科では、外国人の発音が聞けるようにもなっています。日本全国の学校では、教材備品も進化しており、子供達はそのような教育環境の自治体と同じように学び、競争していかなければならない。そのような教育機材の充実を図る視点も重要だと考えています。

（参加者Ｇ）

・ 学童クラブを作れないのか？　学童が無いため他の学校へ入学してしまう子供もいる、移住者のニーズを満たす可能性もあるのでは？

（岡田部長）

・ 一つの基準として 10 人以上の利用が必要となっています。国の補助基準もそのようになっており、神余地区ではなかなか難しい現状です。学童に捕らわれず、地域の方々が集まる場所で一旦子供達を預かるなど、別の方法での見守り方策を考えるのもあるかと思います。

（藤本副課長）

・ 学校再編の議論で考えなければいけないことは、例えば、これから移住者を増やし、この地区に何人増やすから学校を残すといった、不確定の事項を基準に検討を行うべきではないと考えています。
・ 冒頭でも説明しましたが、日本全国で子育て世帯の奪い合いの状況が発生しているなか、新たな施策で人が増えるだろうといった仮定の話しで議論を行うより、保護者の中には早く一定規模の学校で子供を学ばせたいと思っている方もいるかもしれませんので、今置かれている現実的な状況の中で、保護者の方々がどのような学校規模で子供を学ばせ

たいのかといった議論をするべきと考えています。

（参加者Ｈ）
・ 地区での協議のスタート時期は、資料にあるように令和４年 10 月からなのか？
・ 住民の方の意見もあり意見集約することは、なかなか難しいのではないか？
（藤本副課長）
・ スタートの時期については、保護者の方々それから地域の方々と相談させて頂きたいと思っています。
・ これからの未来の子供達をどういう学校環境で育てたいのかという視点で考えてもらい、地域の意見を纏めて頂きたいと考えています。

（参加者Ｉ）
・ 神余小を守りたいと思って今日参加している。
・ 全国的な少子化だからこそ、子供一人ひとりを大事にしてあげたい。また、不登校児も増え、街中では学校に行けていない子供も多いと聞いているので、学区のルールを撤廃し、市内にスクールバスを出し、街中から神余小学校に通えるようにすれば良いのでは？
（藤本副課長）
・ 学区フリーとしている自治体は全国で数パーセント（２％）であり、地下鉄やバスなどの公共交通網が発達し、子供達が自分たちでどの学校へも通える環境がある自治体での導入がほとんどです。
・ 但し、実施している自治体では学区フリーにしたことで、より小規模の学校への通学者が減少してしまう現状や、スクールバスを市内網の目に走らせることは、多額の費用が必要となってくるため、それらに対する市民理解も必要となるところです。
（参加者Ｉ）
・ 子供が学校を選べるようにするのも、一つの意見として残しておいて下さい。

（参加者Ｊ）
・ 今後の災害を見据えたなかで、市内の方では津波の危険性があること、学校施設も老朽化していること、神余小の建物であれば比較的新しい。
・ 学校運営上で災害が起きたとき、安心な環境を保てるのかについて聞きたい。
（藤本副課長）
・ 津波浸水区域に入っている学校施設は、純真保育園、第一中学校、館山中学校ですが、例えば館山中学校であれば、校舎の３階以上であれば浸水の区域外となるため、それら定期的な避難訓練を実施し安全対策を行っているところです。

（参加者Ｋ）
・ 保護者としては、この神余小は是非残して欲しい。
・ 移住者であり、小学校・中学校とも大規模な学校を経験した身としては、人間関係を深く築けなかった印象を持っており、この神余小は、私自身が入学して卒業したかったっていう思いをずっと持ち続けています。
・ 複式学級もマイナスに感じてなく、むしろプラスに働いていると考えています。上の子が、下の学年の面倒を見て、先生や地域の方との濃厚な関わり合いがあり、大人数中で切磋琢磨することも必要かもしれませんが、私の中では、神余小の濃厚な関わり合いに教育的意義があると感じています。
・ 少子化で今後人数が増えない現実があるが、魅力ある学校を残すことで、地域との連携

の中で魅力をアピールしていけば子供が自然と増える。そういう形を、教育委員会や地域の皆さん模索していきたい。

・ 一個人、保護者としての意見として捉えて頂きたい。

（参加者Ｌ）

・ 通学上の子供達の交通安全対策として、幅員が狭いことに関してどう感じているのか。

（庄司室長）

・ 過去、小学校児童が登校中の事故に命を落としたこともあり、市では交通安全プログラムを立ち上げ、教育委員会、警察、安房土木など様々な関連機関と連携し対策を講じているところです。

・ 当然ながら、神余地区の県道の拡幅に関しても県の方へ説明し要望を行っているところですが、用地の関係もあり現状では拡幅することが難しい状況です。

・ よって、警察の方からスピード減少の対策や取り締まり強化を行っていただいているとともに、学校の校長や教頭先生も一緒に歩き、子供たちの安全対策を図っています。

（参加者Ｃ）

・ 県道のトンネルに関しても中々対策が進まない。雨天時には、雨水が壁面から溢れそのなかを、高校生が自転車で通学したりしている。それらに関しても、市の方から県へ要望を出して修繕して欲しい。

（藤本副課長）

・ 抜本的な対策が必要な個所は、市としても要望を出し続けることが重要であり、引き続きそれらの対策が図れるよう要望を行っていきます。

・ また八街での事故もあり、昨年度には市内全小中学校区で、危険個所の再点検、新たな視点での危険個所の洗出しを行い、警察や千葉県との協議を行ってきたところです。

（参加者Ｃ）

・ これから地域で意見を集約する際に、複式学級に関して色々な議論を我々もすべきだと思うのですが、その際に教員の方々の負担を含めて議論をすべきなのか？

（教育長）

・ この資料の中においても記載していますし、もっと情報が必要であれば、私どもは現実に教員の生の声を聞いていますのでそれらを紹介することも可能です。

（参加者Ｃ）

・ 先生方の負担がかかるって言われると、議論にならないかなと思いまして。

（教育長）

・ 折角の機会ですので、私の方から小規模校や複式学級を経験している教員の実際の声を紹介しますが、まずメリットの方ですが、

□ 子供たち一人一人に目が行き届く。

□ クラスを纏めやすい

□ （事務処理になりますが）通知表やテスト採点、家庭配布資料が量的に少なく済む。

次に、デメリットの方ですが

□ 学年単クラスだと指導方法などを相談できる同学年の職員がいない。中学校では同じ教科の教員がいない場合、本当に自分１人の中で教材研究をして１人で対応しなければならない。

□ 複式では授業準備の負担が大きい。例えば、２年・３年の２つの国語科目の教科研究をして同時展開する必要があり時間的負担がかかる。

□ 学校全体の職員が少ないため、1人で複数の担当分掌をこなさなければならない。例えば、生徒指導主任と美化担当を両方行うなど。

（藤本副課長）

・ 市として教員の負担を含めた話をする理由ですが、先程話した通り、少子化と合わせて全国的な教員不足や過酷な労働環境も社会問題となっており、自分の子供を預ける学校の先生方が置かれた環境も知った上で、それらを含めこれから意見交換中するなかで判断して頂きたいと思っています。

・ 小学校高学年の教科担任制についても国が動き始めています。中学校の学びに繋がるための小学校高学年の学力向上や教員の働き方改革を図るための取組であり、そのような現実的な問題を市民の方々、保護者の方々に知って頂き、その上でどのような学校環境で自らのお子さんを学ばせたいのかを考えて頂く必要があると思っています。

（参加者Ｍ）

・ 小学校の隣に住んでいるもので、昨年移住してきたものです。

・ 毎朝、子供たちの元気な声が届いており、この学校は非常に他に比べ良い学校であり、残していただきたいという気持ちです。皆さん方も、この学校を従来通り存続していただきたいというご意見があると思いますので、存続するためには、どうしたらいいかという意見を踏まえてで、これから検討をお願いしたいとの意見です。

（参加者Ｍ）

・ 各地域の意見が出そろった時の優先度はどうなるのか？

・ 各地域の個々の考えだけが反映されていくのか？

（今井課長）

・ 今の段階で何を優先するのかは持ち合わせていません。

・ 全ての地区からの意見を聞かなければ、分からないことであり、それらを踏まえて考えるべき事項です。

（参加者Ｇ）

・ 地区が市側の説明を希望した場合、来ていただいて説明して頂くことは出来ますか？

（藤本副課長）

・ 可能です。日程を教えて頂ければお伺いして説明します。